

# 青年期の自己同一性に関する研究

## 職業選択と学業意識の視点から

伊藤 敦 美

### Abstract

This study aimed to examine the identity of the adolescent based on vocational choice and academic motivation. Investigation was done on identity status scale, the significance of crisis and commitments, the moratorium scale, and the consciousness of vocational choice and of academic motivation. About sixty percent of the subjects were classified with identity diffusion-moratorium intermediate status. Of those with identity diffusion-moratorium intermediate status, there was a significant difference in the number of subjects participating in a teacher training course versus those participating in other courses. The level of crisis and commitments of the subjects with identity achievement status was high. Subjects with identity diffusion-moratorium intermediate status indicated that their academic motivation came from their desire for employment. Subjects with identity achievement status indicated that their academic motivation came from a desire to satisfy their dreams. The result of this study showed that vocational choice and academic motivation were deeply relevant to identity.

キーワード……自己同一性 職業選択 学業意識 モラトリアム

## 1. はじめに

### 1-1 問題と目的

国立教育政策研究所内に設けられた学習意欲研究会は、「学習意欲に関する調査研究」をまとめた(2002)。研究目的として、「現在、児童・生徒は自分の将来に夢や希望を持つことが難しくなっており、また、社会には、働くことや努力すること、ものづくりの技術や専門性が軽んじられる傾向が見られ、学習意欲の低下が問題になっている。教師や保護者も、児童・生徒の『なぜ勉強しなければならないか』という疑問に答えることが難しくなっている」と現状を指摘している。

大学生についても、「なぜ勉強しなければならないか」という疑問を解決しないまま勉強して、大学へ進学したものの、その後の生き方に迷っている者が多いことが報告されている(若松,

2001、広瀬,1998)。朝日新聞（2000.5.10）には「ぼくらの世代は、とりあえず大学に入って、それなりの会社に就職したいといった漠然としたことしか考えてこなかった。なのに、就職活動になると『個性を持って』『やりたいことをやれ』と言われて困惑している人が多いと思う」と述べられている。

自分の将来に夢や希望を持つことが難しいといわれている現状の中で、これまで学校教育を受けてきた大学生たちは、どのような自己を持っているのか、どのようにして自己を確立し、どういう意識で生活しているのであろうかという疑問が、本研究の出発点である。

青年期後期の最も重要な発達課題の一つは職業決定である。Erikson（1959）によれば、乳児期以来、漸次形成されてきた多数の同一化群が、青年期において社会的役割の獲得という形で統合され、アイデンティティの確立にいたるとされる。その社会的役割の獲得において中心的位置を占めるものが職業選択であり、アイデンティティの拡散・危機は職業決定の不可能という形で最もよく表されるという。

Erikson によって示された、アイデンティティ形成における職業決定の意義は、その後 Munly（1977,1975）によって実証的に確認されている。また、Marcia（1966）のアイデンティティ地位面接（Ego Identity Status Interview）において、職業が重要な領域とされることもこのことを示しているといえる。

下山（1986）は、大学生の職業未決定現象について「このような現象が見られる原因として我が国では進路（職業）指導は、多くの場合進学（受験）指導という形で行われているため、大学入学という目的を果たした後は、進路（職業）指導はその実質的意味を失い、大学生の職業決定のあり方は注目されることがなくなってしまう」とまとめている。この研究は、およそ15年前のもので、現在の社会状況とは異なる大学生についてのものであるが、大学生の職業未決定が学校教育のあり方とも関わっていることを指摘している点で、こんにちの大学生について考える手がかりになる。

本研究では、職業選択と学業意識に焦点を当て、青年期の自己同一性について検討することを目的とする。本論文ではアイデンティティではなく、その日本語訳の同一性という語を用いることにする。

## 1-2 構成

本論文は5章で構成される。第1章では研究の問題と目的、構成、第2章では同一性の調査方法が示される。第3章では研究方法、第4章では研究の結果と考察が説明される。第5章は研究の成果と今後の課題である。

## 2. 同一性の調査方法

Erikson が青年期の課題として、自我同一性 (ego identity) 対同一性拡散 (identity diffusion) を記述してから、自我同一性に関する様々な研究がなされた。自我同一性の達成の程度を取り扱うことは困難であったが、Marcia (1966) の研究は従来の研究の欠点を克服した画期的なものであった。

Marcia は、自我同一性の達成の課題に2つの基準を設けた。1つは危機(crisis)があったか否か、もう一つは傾倒(commitment)の程度である。この2つの基準によって自我同一性問題への対処の仕方を4つに類型化し「自我同一性地位(Ego Identity Status)」と名づけ、それを決定するための半構造化された面接(同一性地位面接)を考案した。この研究は、心理・社会的な基準を用いて、自我同一性の達成という問題に対して直接アプローチし、その問題に対する解決様式の多様性を示したという点、及び操作的に扱うことが非常に難しい Erikson の自我同一性の概念を実証的に研究する方法を提供した点で高く評価できる。

無藤(1979)は、この Marcia (1966) の手法が日本でも適合するかどうかを検討した。その結果、日本青年の自我同一性の確立に、宗教の領域はさほど重要ではないことが示され、宗教の代わりに設置した価値観の領域が、職業とともに重要な領域であることが示された。

しかしながら、面接法によるこの手続きでは、多数のデータを収集することが困難である点、危機及び自己投入について面接者が有るか無いかという非常に大まかな判断を行う点で必ずしも客観的で妥当な判定方法であるとは言えない。

そこで加藤(1983)は、Marcia (1966) が提示した同一性地位概念を検討整理し、その客観的な判断を可能にする質問紙を作成した。これは、領域を特定しない、A: 現在の自己投入(傾倒)、B: 過去の危機、C: 将来の自己投入の希求の3変数12項目からなり、3つの変数の組み合わせにより、6つの同一性地位に分類するものである。従来の同一性達成、早期完了、モラトリアム、同一性拡散の4地位のほかに、中程度のBを経験した上で、高い水準のAを示す者を「同一性達成 権威受容地位(A-F 中間地位)」とし、Aの水準が中程度でCの水準も「積極的モラトリアム地位」と「同一性拡散地位」との中間に位置する者を「同一性拡散 積極的モラトリアム中間地位(D-M 中間地位)」とした(Table 1)。本研究では、同一性の調査にこの加藤(1983)の方法を用いることとする。

### 3. 研究方法

#### 3-1 対象者

茨城県内の私立大学1~3年生 268人

#### 3-2 調査期日

2000年11月

### 3-3 調査の概要

調査用紙を大学の授業時間に配布し、終了後回収した。質問紙は、表紙、同一性地位判定尺度、領域別危機 - 自己投入尺度、モラトリアム尺度、職業選択に関する意識調査の5枚から成っており、被験者はこの質問に答えることが求められた。

### 3-4 課題の内容

#### 1 同一性地位判定尺度（3 下位尺度 12 項目）

加藤（1983）による自己同一性地位判定尺度を用いた。回答方法は「全くその通りだ」から、「全然そうではない」までの6件法とし、最も高い水準に対応する反応を6点、最も低い水準に対応する反応を1点として、4項目の合計得点を各変数の値とした。

#### 2 領域別危機 - 自己投入尺度

加藤（1983）の調査をもとに作成したものである。同一性の成立にはいくつかの重要な危機や自己投入の領域がある（伊藤,2000）。職業、家族、友人との関係（同姓・異性）、勉強、生き方や価値の領域である。この6つの項目について、現在及び過去の危機と自己投入の水準を求める質問紙を作成した。加藤（1983）にならい、危機は「迷ったり考えたりした経験」という表現で、自己投入は「重要な生きがいあるいは努力の対象」という表現で教示文において説明した。具体的には、現在、大学に入った頃、高校2年生の頃の3つの時点の各々における危機、及び自己投入の水準について、0点から3点までの4件法によって回答を求めた。教示文を Table 2 に示す。

#### 3 モラトリアム尺度（3 下位尺度 18 項目）

下山（1992）を若干変更して行った。加藤（1983）において、被験者の半数以上がこの地位であったにもかかわらず、詳しい検討はなされていなかった。そこで、D-M 中間地位の者の状

Table 1 加藤（1983）の6つの同一性地位の定義

同一性地位	定義
同一性達成地位	過去に高い水準の危機 <sup>1)</sup> を経験した上で、現在高い水準の自己投入 <sup>2)</sup> を行っている者。
権威受容地位 <sup>3)</sup>	過去に低い水準の危機しか経験せず、現在高い水準の自己投入を行っている者。
A-F 中間地位 <sup>4)</sup>	中程度の危機を経験した上で、現在高い水準の自己投入を行っている者。
積極的モラトリアム地位 <sup>5)</sup>	現在は高い水準の自己投入は行っていないが、将来の自己投入を強く求めている者。
同一性拡散地位	現在低い水準の自己投入しか行っておらず、将来の自己投入の希求も弱い者。
D-M 中間地位 <sup>6)</sup>	現在の自己投入の水準が中程度以下の者のうちで、その現在の自己投入の水準が同一性拡散地位ほどに低くはないが、将来の自己投入の希求の水準が積極的モラトリアム地位ほどには高くない者。

態を把握するためにこの尺度を用いることとした。ただし、下山(1992)で用いられた尺度は、因子分析の結果を見ると「回避」と「延期」の因との間で重なる部分が多く、相関係数も高い(R=0.63)ので、本研究では「回避」の項目は除き、「拡散」<sup>7)</sup>「延期」<sup>8)</sup>「模索」<sup>9)</sup>の3下位尺度18項目に項目を変更することにした。

#### 4 職業選択と学業に関する意識調査

大学生が、職業選択についてどのような意識を持っているかを概観するための調査である。10の質問項目から成っており、自由記述と選択肢が組み合わされた質問紙である。

### 4. 結果と考察

#### 4-0 調査対象者の内訳

調査対象者の合計は268人であった。調査を実施した大学は、大きく分けて、教員養成を主な目的とする学科と、教員養成を主な目的とはしない学科とに分けられるので、その内訳をTable 3に示す。

Table 2 領域別危機 - 自己投入質問紙

#### 危機に関する教示文と諸領域

以下に示されているおのおのについて、現在のあなたはどの程度迷ったり考えたりしていますか。また高校2年生の頃、大学に入った頃のあなたはどうでしたか。

特に迷いも考えもしていないものに0点、少し考え迷ったりしているものに1点、かなり考え迷っているものに2点、非常に考え迷っているものに3点というように、考えたり迷ったりしている程度に応じてそれぞれに点をつけてください。

自分と家族との関係

同性の友人との関係

異性の友人との関係

勉強

将来の仕事

自分が目指すべき生き方や価値

#### 自己投入に関する教示文

以下に示されているおのおのについて、現在のあなたはどの程度重要な生きがいがあるいは努力の対象ですか。また高校2年生の頃、大学に入った頃のあなたはどうでしたか。

特に生きがいでもあるいは努力の対象でもないものに0点、少し重要な生きがいがあるいは努力の対象であるものに1点、かなり重要な生きがいがあるいは努力の対象であるものに2点、非常に重要な生きがいがあるいは努力の対象であるものに3点というように、重要な生きがいあるいは努力の対象である程度に応じてそれぞれに点をつけてください。

\*領域別の項目は危機の場合と同様

(著者作成)

#### 4-1 同一性地位判定の結果

##### 0 採点方法

「現在の自己投入」「過去の危機」「未来の自己投入の希求」の3つの変数それぞれの得点を合計し、同一性地位を分類した。各変数は4項目から成っているため、最高で24点、最低で4点である。

##### 1 調査者全員における得点の平均と標準偏差

各同一性地位を定義する3変数の、調査対象者全体における平均と標準偏差は以下の通りである。この平均値を判定すると、D-M 中間地位になる。

現在の自己投入	M=15.80	SD=3.70
過去の危機	M=17.69	SD=3.18
将来の自己投入の希求	M=16.79	SD=3.19

##### 2 各同一性地位の分布

各同一性地位の数と学年別の同一性地位の数を Table 4 に示す。D-M 中間地位が 161 人（60.0%）と全体の 6 割を占めている点が注目される。積極的なモラトリアムではなく、同一性拡散地位ほどでもないというこの D-M 中間地位がこれほど多いことは、今日の大学生の特徴であると言えよう。それに対して、積極的なモラトリアムは 44 人（16.4%）と、D-M 中間地位を除く他の地位に比べると多いが、全体に対する割合としては低い。同一性達成地位も、18 人（6.7%）とかなり低い割合である。その他の地位についても、権威受容地位 4 人（1.5%）、同一性拡散地位 23 人（8.6%）、A-F 中間地位 18 人（6.7%）といずれも低い割合であった。

Table 3 調査対象者の内訳

	1年	2年	3年	学科 Total
教員養成系の学科	42人	32人	44人	118人
教員養成系以外の学科	36人	69人	45人	150人
学年 Total	78人	101人	89人	268人

Table 4 学年別の同一性地位の数

	D-M 中間	同一性達成	積極モラトリアム	A-F 中間	同一性拡散	権威受容	Total
1年	51人	6人	10人	6人	5人	0人	78人
2年	59人	4人	14人	9人	14人	1人	101人
3年	51人	8人	20人	3人	4人	3人	89人
Total	161人	18人	44人	18人	23人	4人	268人

（著者作成）

### 3 学年別の同一性地位

学年別の同一性地位について検定を行ったところ、有意な傾向はあるものの、目立った差異は認められなかった ( $X^2=16.91, df=10, p=0.1$ )。また、全体で6割と特に多かったD-M中間地位の数と、その他の地位の数について学年間の検定を行ったところ、有意な差はなかった ( $X^2=1.32, df=2, n.s.$ )。そこで、本研究では、1~3学年にわたる大学生の傾向と特徴を概観する立場から、1~3年生を区別することなく分析を進めることとする。

### 4 学科別の同一性地位

教員養成系の学科のD-M中間地位の値が目立って多く、D-M中間地位の数と、その他の地位間の数の検定を行ったところ、有意な差が認められた ( $X^2=3.928, df=1, p=0.05$ )。学年ごとにみても、全学年で教員養成系の学科のD-M中間地位の値が高いことが認められた。近年、教員採用試験は厳しく、大学で勉強しても採用試験に通ることのできる可能性は非常に低い。しかし、教員養成系の学科は、他の学科に比べ必修科目も多く、学生生活は大変である。その結果、同一性拡散まではいかないが、自分がどう生きて行ったらいいか迷い、悩み、かといって、新しい道を見つけることも出来ず、厳しい試験に向けての努力をする気にもなれず、D-M中間地位に留まっている学生が多いのかもしれない。

## 4-2 領域別危機 自己投入の結果

同一性地位ごとに、いつ、どんな項目で危機あるいは自己投入を経験しているかを調べることを目的に、本調査をおこなった。結果を以下に示す。

### 0 採点方法

「職業」「家族」「同性の友人」「異性の友人」「勉強」「生き方や価値」の6つの領域について、「現在および過去の危機」「現在および過去の自己投入」の程度を点数で表すことを求めた。それぞれの領域について、得点を合計した。1つの領域の最高得点は2点、最低得点は0点である。

### 1 諸領域における各同一性地位の水準

各同一性地位の特徴を把握することを目的にして、現在、大学に入った頃、高校2年生の頃の3時点を平均した領域ごとの危機のプロフィールをFigure 1に、自己投入の水準のプロフィールをFigure 2に示す。

危機の水準については、「将来の仕事」「生き方や価値」「勉強」の領域で全体的に高い水準であることが見て取れる (Figure 1)。6つの地位のうちでは、同一性達成地位が一貫して高い値を示しており、次いで積極的モラトリアム地位、D-M中間地位と続く。逆に、権威受容地位は一貫して低い水準である。「自分の生き方について戸惑うことなく、両親や権威の期待と目標をそのまま受け入れて、専心している状態である」というこの地位の特徴から、ほとんど危機を感じてはいないのだろう。これは、「家族」の領域において、ひときわ低い値であることからも

明らかである。同一性拡散地位の「勉強」の領域の危機の水準が特に高いことも注目される。それに対して、自己投入の水準は低い。自分の生き方はよくわからないが、とりあえず、勉強はしなくてはいけないものなのだという意識をもち、強い危機感を抱いていることがうかがえる。

次に、自己投入の水準について検討する（Figure 2）。ここでも、同一性達成地位が高い水準を示した。次いで、A-F 中間地位が高い水準を示した。両者ともに「将来の仕事」と「生き方や価値」の領域で最高値を示しており、権威受容地位が「勉強」の領域で最高値を示していることと比較してみると、後者の現状順応的な性格が推測される。

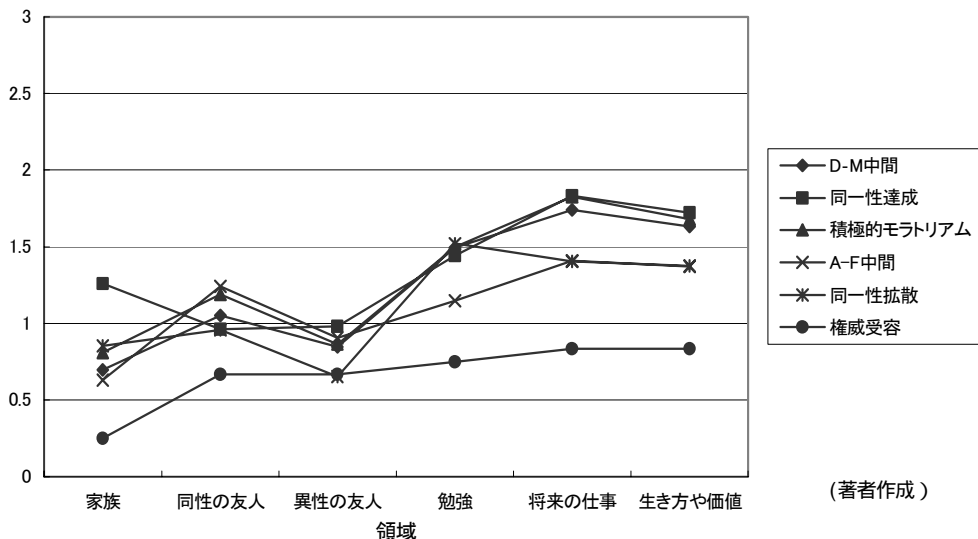
積極的モラトリアム地位、D-M 中間地位は共に中程度の自己投入の水準であった。両者ともに、自らの生き方を模索し、自己投入を行っているのであろう。この両者が「将来の仕事」「生き方や価値」の領域において、同一性達成地位や A-F 中間地位よりも低い水準であったのは、両者が共に現在危機の最中におり、悩んでいることから、自己投入にまではいたっていないことによると考えられる。

同一性拡散地位は、一貫して非常に低い自己投入の値を示しており、その特徴は明瞭である。特に、他の同一性地位に比較して「将来の仕事」「生き方や価値」の領域が著しく低いことは、この地位の没理想性および、時間的展望の欠如という特質がうかがわれる。また、危機の水準の時と同様に、「家族」の領域の値が低いことも注目される。同一性拡散地位に「家族」の領域がどのように関わっているのかは興味深い課題である。

## 2 時期別の諸領域における「危機」の水準

「高校生の頃」の諸領域における危機の水準は、現在同一性達成地位にいる者が、既に高い水準の危機を経験している。特に「生き方や価値」「将来の仕事」「勉強」「家族」で高い水準

Figure 1 諸領域における各同一性地位の危機の水準



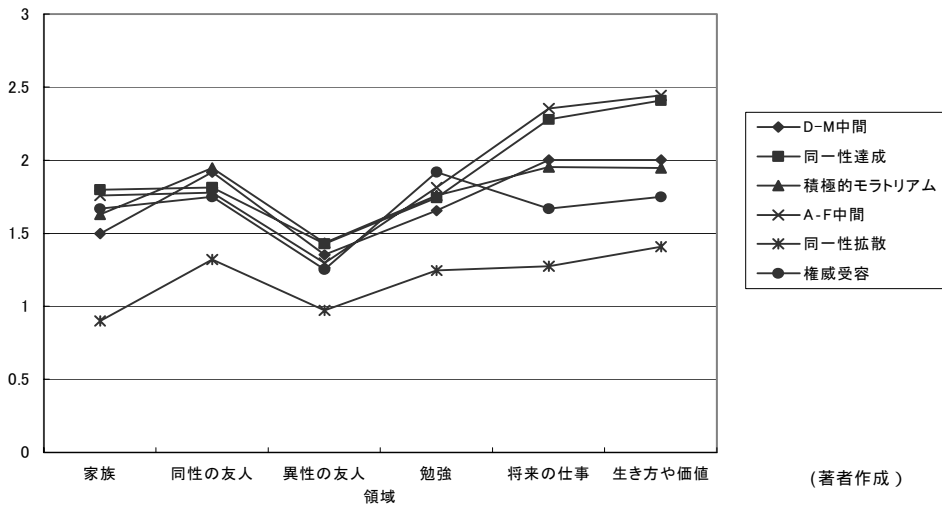


を示している。次いで、A-F 中間地位、積極的モラトリアム地位の順になっている。「家族」の領域は特に低く、この地位の特徴が表されている。現在、権威受容地位の者は、高校生の頃の危機の水準も最も低い。現在、同一性拡散の者の危機の水準は概して低いが、にもかかわらず「勉強」の領域では極めて高い危機の水準を示していることが注目される。

次に、「大学に入った頃」の危機の水準について検討する。この時期も、同一性達成地位の危機の水準が最も高い。次いで積極的モラトリアム地位、D-M 中間地位と続く。「生き方や価値」「将来の仕事」で高い水準を示している点は、「高校生の頃」とほぼ変化はないが、大学入学という目標を果たした後のためか「勉強」の危機の水準が下がっている。それに対し「将来の仕事」が最も高い「危機」の水準となっている。大学に入り、将来どんな仕事をしていくかを考え始めるのであろう。現在、権威受容地位の者は、非常に低い危機の水準を示している点が注目される。もはや、受験勉強もなく、悩むことも無くなったようで、「勉強」の領域は0点である。危機の水準全体の得点も、高校生の頃は平均 1.11 点であったのが、1.0 点と若干だが下がっている。受験を乗り越えて大学に入学したことによって、危機であると感じたり、悩むことが少なくなったのだろう。

次に、「現在」の危機の水準について検討する。全体的には、「将来の仕事」の領域で非常に高い水準を示している。次いで「生き方や価値」の領域が高く、大学在学中に自分が「何をしたらいいか、何をしたいか」という問題に積極的に取り組んでいる様子がみられる。危機の水準の平均得点は、大学入学時点で 1.0 点であったのが、1.29 点へと増加している。全体の増加の傾向に反して、「同性の友人」の領域については減少傾向にある。

Figure 2 諸領域における各同一性地位の自己投入の水準



同一性地位別では、依然として、現在、同一性達成地位にいる者の危機の水準が高い値を示している。次いで、積極的モラトリアム、D・M 中間地位とつづく。この傾向は、大学入学時点と変わらない。全体的には、権威受容地位の者の危機の水準が最も低い点であることに変化はないが、大学入学時点で 0.33 点であったのが、0.88 点と値は増加傾向にある。他の地位に比べて、低いながらも自らの置かれている現状に「危機」意識を持ち始めていると推測できる。

以上の結果、各時期における危機の水準は、現在、同一性達成地位の者が最も高く、次いで積極的モラトリアム地位、D・M 中間地位と続くことが分かった。それに反して、最も低い水準を示すのは権威受容地位であることが明らかになった。全体の傾向としては、現在の危機の水準が最も高く、高校生の頃、大学に入った頃の順で減少する。領域別では、現在および大学に入った頃は、「将来の仕事」で最も高い水準を示し、高校生の頃は「生き方や価値」で最も高い水準を示す。

### 3 時期別の諸領域における「自己投入」の水準

「高校生の頃」の諸領域における自己投入の水準は、全体的には、現在、同一性達成地位の者の自己投入の水準が最も高く、次いで A・F 中間地位が高い水準を示している。全体としては高い水準ではないものの「同性の友人」「勉強」の領域で権威受容地位が最も高い水準を示している点が注目される。それに対して、同一性拡散地位の者は、どの領域でも最も低い水準を示す。領域別では、「生き方や価値」「同性の友人」に対する自己投入の水準が高い値を示している。

次に、「大学に入った頃」の諸領域における自己投入の水準について検討する。全体としては、「高校生の頃」の平均値が 1.54 点であるのに対して、1.63 点と若干自己投入の水準が増加している。同一性達成地位の者の水準が高いこと、同一性拡散地位の者がどの領域でも最も低い水準を示すことは、「高校生の頃」と変化はない。領域別でも、「生き方や価値」で最も高い水準を示す点は変化していないが、それに次いで「将来の仕事」で高い水準を示していることは、大学に入って多くの者が就職を意識し始めた事を示していると思われる。

次に、「現在」の諸領域における自己投入について検討する。全体としては、平均値が 1.92 点と、高校生の頃の 1.54 点、大学に入った頃の 1.63 点と比較して高い水準の自己投入を示している。特に「将来の仕事」の増加が著しく、大学在学中に多くの者が就職にむけて自己投入し始めることが推測できる。全体としては増加の傾向にあるが、現在、D・M 中間地位にいる者の「勉強」の領域が落ち込んでいる。現在、D・M 中間地位にいる者は、現在の危機の「勉強」の領域で高い水準を示しているため、積極的に自己投入できないのだろう。逆に、権威受容地位の者はこの領域で高い自己投入の水準を示している。現在の危機の水準は、6 つの同一性値の中で最も低く、悩んだり、迷ったりすることなく、自己投入しているのであろう。以上のような変化はあるものの、同一性達成地位の者の自己投入の水準が最も高く、次いで A・F 中間地位が高い水準を示している点では、それ以前と目立った変化はない。

以上の結果、各時期における自己投入の水準は現在同一性達成地位の者が最も高く、それに次いで A-F 中間地位、積極的モラトリアム地位であることが示された。それに対して、最も低い自己投入の水準を示すのは、現在、同一性拡散地位の者であった。ただし、「現在」の自己投入の「勉強」の領域では、D-M 中間地位が最も低い水準であった。全体の傾向としては、現在の自己投入の水準が最も高く、大学入学の頃、高校生の頃の順で低くなった。領域別では、高校生の頃は「同性の友人」の水準が高いものの、「生き方や価値」「将来の仕事」の順で高い水準を示す。大学入学時点でも「生き方や価値」「将来の仕事」の順で高い水準を示すが、現在は、「将来の仕事」と「生き方や価値」が逆転し、職業についての意識が高まっていることが明らかになった。「勉強」の領域は、高校生の頃に比べ、大学入学時点で減少するが、「現在」の自己投入では再び増加している。これもまた、就職を意識してのことではないだろうか。

#### 4-3 D-M 中間地位の分析

同一性地位尺度調査で、D-M 中間地位が全体の 6 割を占める結果となったことから、現代の青年の状態を知るためには、この D-M 中間地位をさらに詳しく検討する必要があると考えられる。そこで、本章の 2 節で分析した危機および自己投入の水準についてさらに詳しく検討する。

##### 1 D-M 中間地位の危機の水準

D-M 中間地位の各時期における領域別危機の水準と、自己投入の水準について検討する。危機の水準は、3つの時期でほぼ変化はないが、「将来の仕事」と「生き方や価値」の「現在の危機の水準」が他の領域に比べて高い値を示している。現在、D-M 中間地位にいる者は、この領域で特に悩んだり考えたりしていることがうかがえる。自己投入の水準も、「将来の仕事」と「生き方や価値」で高い水準を示している。これも、現在、D-M 中間地位にいる者がこの領域に特に注意を払っていることを示している。

同一性地位の分類の際に、教員養成系の学科とそうでない学科では、D-M 中間地位の者の数に有意な差があるという結果であったが、危機の水準、自己投入の水準の各領域については、有意な差は認められなかった。だが、有意差はないものの、一貫してすべての領域で、教員養成系の学科のほうが、若干高い水準を示した。

##### 2 モラトリアムについての分析

本調査で用いた加藤(1983)の調査では、モラトリアムは建設的なモラトリアムと、非建設的なモラトリアムに分けて述べられている。「日本語の『モラトリアム』には、積極的、建設的な努力の要素は少なく、むしろ本来の moratorium と同一性拡散の中間状態であると考えられる」(加藤,1983)したがって、D-M 中間地位とは、日本語でいうところの「モラトリアム」に相当すると考えることができる。そこで、D-M 中間地位の者の特徴をさらに詳しく検討するために、下山(1992)のモラトリアム尺度を用いた調査を行った(第3章第4節参照)。その結果を以下に示す。

### 採点方法

「拡散」「延期」「模索」の3つの下位尺度ごとの得点をそれぞれ合計し、最も得点の高いところに分類した。なお、2つの尺度間、あるいは3つの尺度間で得点に近い場合が多かったので、副評定を導入した。最も得点が高いものを主な尺度とし、1つの尺度の最高得点が24点であることから、その半分の12点以上を取っているものを副評定とした。

調査者全員における得点の平均と標準偏差

3つの下位尺度の調査者全体における平均と標準偏差は以下のとおりである。

「拡散」	M=16.47	SD=3.40
「延期」	M=9.99	SD=3.23
「模索」	M=16.27	SD=3.37

### 結果

161人のD-M中地位の被験者のうち、86人(53.4%)が「拡散」、73人(45.3%)が「延期」、2人(0.01%)が「延期」の状態であった。「拡散」とは、職業決定を行う意思はあるものの、現実的な職業決定ができず、職業選択の方向が拡散し、心理的に不安定となっている状態を示す尺度である。この状態の学生は、職業決定課題に対応できないために、その結果としてモラトリアムになっていると定義付けられている。「延期」は、我が国の健康な大学生の間で見られる典型的なモラトリアムを示す尺度であり、この状態の学生は、大学を社会的責任の免除された時期とみなし、その間は職業に関する決定を延期し、自由に遊びを楽しむが、必要になれば社会参加を行うのが特徴である。「模索」は、社会的責任を避ける我が国独特のモラトリアム状態とは異なり、主体的に職業決定に取り組み、社会的責任を果たすよう努力している状態を示す尺度である。この状態の学生は、職業選択の社会的重要性を意識し、積極的に職業決定に取り組み、自分に適した職業を選択するよう努力している。

下山(1992)は、3つの概念を以上のように定義している。「模索」は、同一性地位尺度調査の「積極的モラトリアム地位」と意味的に重なる部分もあるが、ここで分析の対象としているD-M中間地位の被験者は、積極的モラトリアム地位の被験者と比べ、「将来の自己投入の希求」が低いのが特徴である。したがって、職業決定に向かって努力はしているものの、積極的モラトリアムの被験者に比べて、将来に対する積極性の水準が低いという特徴がある。

次に、学科別の結果について検討する。3つの下位尺度に分類された被験者の数は教員養成系の学科とそうでない学科間に有意な差はみられなかった。D-M中間地位の被験者のモラトリアムの状態は、学科にはよらないことが示された。副評定を含めて見てみると、「拡散」だけ、「模索」だけではなく、ほとんどが「拡散」「模索」両方の性質を持っていることが示された。モラトリアムといっても、単純にひとつの性質だけをもっているのではなく、模索の性質を多く持つ「拡散」、拡散の性質を多く持つ「模索」など、いくつかの性質が組み合わさって、モラトリアム状態となっているようである。

また、本調査ではモラトリアムの積極的な面が示されていることが注目される。全体の半数までとはいかないが、モラトリアムとはいっても、積極的に職業選択をしようとする「模索」が多くの割合を占めている。「拡散」状態にある被験者でも、副評定に「模索」が入っている者が68人と、かなり積極的な面が出ているといえる。逆に、近年増えているといわれる「延期」型はほとんどおらず、副評定に入った者も21人と、積極的に職業決定を先延ばしにしようとしている学生の姿は本調査からはうかがえない。

#### 4-4 意識調査の結果

大学生が職業選択と学業について、どのような意識をもっているのかを具体的に知るために、意識調査を行った。その結果を以下に示し、検討する。

##### 1 卒業後の予定について

卒業後は、約80%の者が就職したいと考えているらしい。しかし、約15%の者は、今後どうするか分からないと答えている。この中には、教員を目指して大学に入学したものの、教員採用試験が難しいために、どうしていいかわからないという意見もあった（Table 6）。

就職しないと答えた者の主な理由は、進学、留学であった。就職することを選んだ理由としては、約43%が「経済的な自立」のため、約37%が「生きがい」のためと答えている。それに続いて「周囲の雰囲気」「両親のため」が上位を占める結果であった。

質問1で「就職したい」と答えた者に対して、「就きたい職種は決まっているか否か」をたずねた結果をTable 7に示す。同一性達成地位の者は、ほとんど就きたい職種が決まっているのに対して、同一性拡散地位の者は、就職はしたいが、どんな職種に就きたいか70%以上の者が決まっていないう結果であった。

次に、「希望する職業の形態」についてたずねたところ、すべての同一性地位で正式採用を希望する者が最も多かった(87.7%)。特に、同一性拡散地位の者が多く95%が、正式採用を希望する結果であった。「就職はしたいが、どんな職種がいいかは分からない、でも正式に採用されたい」と考えているのだろう。正式採用の希望は、同一性拡散地位の者が最も高い割合であるのを始めとして、次いでD・M中間地位、A・F中間地位へと続き、同一性地位が安定していないほど高いことが示された。同一性達成地位は、正式採用の希望が最も低い結果であった。

「なぜその職業形態を希望するのか」という問に関しては、正式採用を希望する者のほとんどが、「安定」を挙げていた。経済的な安定、精神的な安定を正式採用に求めているらしい。

「職業とはあなたにとってどういうことか」という問に対しては、積極的モラトリアム地位、同一性達成地位は、自分の生きがいや、自己実現など個人的な項目を挙げるのに対して、同一性拡散地位、D・M中間地位は、経済的な自立や、安定を挙げる割合が高かった（Table 8）。

##### 2 学業に対する意識

「大学まで勉強を続けてきた理由」についてたずねた結果をTable 9に示す。全体では「職

業に就くため」が最も多かった(23.9%)。学ぶことそれ自体がおもしろいというよりは、職業に就くために勉強しなければならないという意識の大学生が多いのだろう。次いで、「知識を増やすため」「自分のため(自信や可能性)」(13.1%)、「将来の夢をかなえるため」(12.7%)という結果であった。

各同一性地位別に見ると、「職業に就くため」という回答が多かったのは、D-M 中間地位、A-F 中間地位の被験者で、この2群は全体の傾向とほぼ一致していた。特徴的な結果だったのは、同一性達成地位、積極的モラトリアム地位群の結果である。同一性達成地位は「将来の夢のため」が最も多く(27.8%)、次いで「知識を増やすため」(22.2%)が多かった。他の地位で見られる「職業に就くために」勉強してきたという意識の者は少ないことが示された。自分がどのように生きて行きたいのかというしっかりとした意識のもと、勉強に対しても内発的な動機、知的好奇心などによって積極的に取り組んでいる様子がうかがえる。積極的モラトリアム地位で最も多かったのは、「知識を増やすため」(27.3%)であった。自分がこれからどのように生きて行くかについて、積極的に探求しているという特徴を持つこの地位の被験者たちは、知識を吸収することによって、今後に生かそうとしていることが推測できる。同一性拡散地位群は、「みんながするからする」という回答が最も多かった(21.7%)。この結果も、同一性拡

Table 6 卒業後の予定

就職する	就職しない	分からない
218人(81.3%)	8人(3.0%)	42人(15.7%)

Table 7 職種が決定しているか否か

	決まっている	決まっていない
D-M 中間地位(135人)	76人(56.2%)	59人(43.7%)
同一性達成地位(14人)	13人(92.9%)	1人(7.1%)
同一性拡散地位(18人)	5人(27.8%)	13人(72.2%)
平均(218人)	132人(60.6%)	86人(39.4%)

Table 8 各個人の職業の位置付け

	経済的	社会的	個人的	その他
D-M 中間地位(161人)	65人(40.4%)	23人(14.3%)	60人(37.3%)	13人(8.1%)
同一性達成地位(18人)	4人(22.2%)	5人(27.8%)	8人(44.4%)	1人(5.5%)
同一性拡散地位(23人)	13人(56.5%)	4人(17.4%)	6人(26.1%)	0人(0%)
平均(268人)	101人(37.7%)	46人(17.1%)	105人(39.2%)	16人(5.9%)

(著者作成)

散地位の特徴を明瞭に表す結果であった。

次に「現在の大学、専攻を選んだ理由」について質問した結果について検討する。全体で最も多かったのは「学びたいことができそう」という回答(28.0%)で、次いで多かったのは「教員免許がとりたい」(22.0%)であった。大学や専攻を選択する際には、多くの学生は自分が何をしたいかを優先していることが示された。同一性地位ごとに見ても、全体の傾向とほぼ一致している。ただ、全ての地位で「教員免許がとりたい」が上位にあるのは、自分の将来の職業を「教員」と決めているからなのだろうか、あるいは免許を取得しておけば何かの役に立つという考えからなのであるか。

以上の調査結果は、各同一性地位の特徴がかなり明確に表れた結果であった。したがって、同一性地位判定の結果、D-M 中間地位が全体の6割を占めているので、大学生の主な意識は、D-M 中間地位の特徴が反映されると考えられる。本調査の結果では、D-M 中間地位は、それほど目だった特徴はみられなかった。強いて言えば、目立った特徴がないのが特徴といえるだろう。D-M 中間地位の大多数の者が就職したいとは思っているが、そのうちの多くがどんな職業に就きたいかわからない。その割合は、同一性拡散地位ほどではないが、同一性達成地位よりは少ない。職業に対して求めているものも、経済的、個人的ほぼ半数ずつで、結婚後は半数が仕事を続けたいと思っているが、後は辞めるか、どうしようか迷っている。将来は楽しみだけけれど、不安もある、といった一般的な学生の姿が見えてきた。

Table 9 大学まで勉強を続けてきた理由

	就職	教員	資格	将来の夢	知識	自分	大学入学	経済	周囲の影響	その他
D-M 中間	44人 (27.3%)	18人 (11.1%)	9人 (5.6%)	22人 (13.7%)	16人 (9.9%)	21人 (13.0%)	7人 (4.3%)	3人 (1.9%)	0人 (0%)	16人 (9.9%)
同一性達成	2人 (11.1%)	1人 (5.6%)	1人 (5.6%)	5人 (27.8%)	4人 (22.2%)	3人 (16.7%)	1人 (5.6%)	0人 (0%)	0人 (0%)	1人 (5.6%)
平均 (268人)	64人 (23.9%)	28人 (10.4%)	19人 (7.1%)	34人 (12.7%)	35人 (13.1%)	35人 (13.1%)	8人 (3.0%)	4人 (1.5%)	14人 (5.2%)	27人 (10.1%)

(著者作成)

## 5. 研究の成果と今後の課題

教員養成系の学科で D-M 中間地位群が有意に多い結果であったことは意味深い。教員養成系の学科で学んでいる者は、ほとんどが以前から教員になることを希望しており、大学に進学し

で勉強を続けている。日々、教員免許を取得するための授業は行われ、それに向けて努力はしているものの、採用試験がかなり厳しく、ほとんど受からない現状であるために、自らの将来に対して考えざるをえない状況になっている。したがって、高い水準の危機意識を持つてはいるものの、積極的に自己投入できず、勉強にも身が入らない状況となり、その他の学科に比べて、D-M 中間地位が有意に多い結果となったのであろう。それに対して、教員養成系以外の学科では、厳しい状況ではあるものの、目に見える形で厳しさは伝わってはこないため、D-M 中間地位になることが少なく、積極的に自己投入を続けられるのであろう。

これは、大学生の職業選択に関する意識調査の結果にも表れている。D-M 中間地位において、就きたい職種が決定していない者は、47%にのぼるが、教員養成系の学科に所属している者で「決まっていない」と回答している者の多くが、「教員にはなりたいたいけれど、試験の難しさから、別の職業を選択しないといけないうが、どんな職業がいいか迷っている」と答えている。

このような現状の中でも、同一性達成地位にあって、自分のやりたいことをきちんと見つけ、それに向かって努力している者もわずか 6.7%（18 人）であったが存在した。危機の水準も、自己投入の水準も高く、自己に対する深い洞察を行った経験を持つのであろう。

なぜ大学まで進学したのかという問いに対して D-M 中間地位の約 6 割が「就職のため、資格のため」と答えているのに対し、同一性達成地位の 6 割は「自分のやりたい勉強があったから」と答えていることから、両者の違いは明らかである。現在、同一性達成地位にいる者は、「やりたいことがやれる環境」にこだわり、現在、D-M 中間地位にいる者は「就職のために資格が取れる環境」こだわって進学した。そのため、社会情勢のために資格の価値が薄れた現在、D-M 中間地位の者は自分の置かれた環境に疑問を抱くことになり、それに対して、同一性達成地位の者は揺らぐことはないという結果になった。

以上のように、職業選択と学業に対する意識とは同一性とかなり密接に関わっている。そして、個人の同一性地位は、生活のあらゆる経験がもとになって形成される。だが、同一性地位は非常に変動しやすい性質を持つという（Marcia,1979;高村,1997）。したがって、同一性達成地位だから、職業や学業に対して明確な意識を持っているのか、職業や学業に対して明確な意識を持つことが出来たから同一性達成地位になるのかという点ははっきりしない。だが、相互が関連しあって、職業意識、学業意識を形成し、同一性を形成している点は明らかである。今後さらに研究を重ねたい。

< 註 >

- 1) ここで使われる危機(crisis)という用語は、ある個人の発達における「重大な転換点、別れめ」を意味するものであり、危険を意味するものではない。
- 2) 自己投入(commitment)は傾倒（無藤,1979）帰依（砂田,1979）などとも訳される（加藤,1983）。
- 3) 権威受容地位(foreclosure status)は、従来、早期完了（村瀬,1972）打ち切り（加藤,1978）などと訳されてきているが、その成立過程を重視して「権威受容」とした。自分の目標と両親の目標との間に違和感



がなく、親の価値観を引き受けて、予定された道を自分の道として歩んでいるようなタイプである(加藤,1983)。

- 4) A-F 中間地位は、identity achievement と foreclosure の頭文字から名づけられている。
- 5) 日本語の「モラトリアム」には積極的建設的な努力の要素は少なく、むしろ本来の moratorium と同一性拡散の中間状態であると考えられる。そこで「積極的モラトリアム」と訳すことにした(加藤,1983)。
- 6) D-M 中間地位は、identity diffusion と moratorium の頭文字から名づけられている。
- 7) 「拡散」とは、職業決定の意思はあるものの、現実的な職業決定ができず、職業決定の方向が拡散し、心理的に不安定になっている状態を示す尺度である。
- 8) 「延期」とは、我が国の大学生の間で見られる典型的なモラトリアム状態を示す尺度。
- 9) 「模索」とは、社会的責任を避ける我が国のモラトリアム状態とは異なり、主体的に職業決定に取り組み、社会的責任を果たすように努力している状態を示す尺度である。

< 引用文献 >

朝日新聞 2000.5.10.

Erikson,E.H., ;1959, Identity and The Life Cycle, International University Press. (小此木啓吾訳編;1973,『自我同一性』,誠心書房。)

伊藤敦美;2000,「青年期の職業選択に関する研究」,茨城キリスト教大学大学院修士論文。

広瀬英子;1998,「進路に関する自己効力研究の発展と課題」,教育心理学研究,46,343 - 355.

国立教育政策研究所学習意欲研究会;2002,「学習意欲に関する調査研究」。

加藤 厚;1983,「大学生における同一性の諸相とその構造」,教育心理学研究,31,292 - 302.

加藤隆勝;1987,『青年期の意識構造』,誠心書房。

Marcia,J.E.;1966, Development and validation of ego identity status. *J.of.Personal and Social Psychology*, 3, 551 - 558.

村瀬加代子他;2000,『青年期の課題と支援』,新曜社。

無藤清子;1979,「自我同一性地位面接」の検討と大学生の自我同一性,教育心理学研究,31,292 - 302.

Munly,P.H.; 1975, Erik Eriksons Theory of Personal Development and Vocational Behavior, *Journal of Counseling Psychology*, 22, 314 - 319.

小此木啓吾;1977,「モラトリアム人間の時代」,中央公論(昭和52年10月号)64 - 102.

労働省;1990,『新規卒者の労働観・余暇観』,大蔵省印刷局。

下山晴彦;1992,「大学生のモラトリアムの下位分類の研究」,教育心理学研究,40,121 - 129.

下山晴彦;1986,「大学生の職業未決定の研究」,教育心理学研究,34,20 - 30.

下山晴彦;1986,「同一性測定における2アプローチの比較検討」,心理学研究,50,357 - 360.

高村和代;1997,「課題探究時におけるアイデンティティ変容プロセスについて」,教育心理学研究,45, 243 - 253.

若松養亮;2001,「大学生進路未決定者が抱える困難さについて」,教育心理学研究,49,209 - 218.

主指導教員(齋藤 勉教授) 副指導教員(井上正志教授・武井横次教授)